

伊那谷学について

伊那谷研究団体協議会

はじめに

伊那谷における学術研究は、各種研究団体および個人において伊那谷をフィールドとしてさまざまな研究活動が長い間継続して取り組まれてきています。その中で最近「伊那谷学」の言葉が、各方面において使われ始めています。

伊那谷研究団体協議会は、各種研究団体を結集し平成8年から学際的な活動展開に努めてきました。各団体の研究分野は異なっても伊那谷という同一のフィールドにおいて研究活動を推進しています。

それら諸研究の成果が伊那谷の地域性を具現化するものであり、総合的に見たときに「伊那谷学」として概念的に考えられてきました。しかし、伊那谷研究団体協議会において統一的な見解は定まっていませんでした。

今回、「伊那谷学とは何か」「伊那谷学の推進のあり方」等について、当伊那谷研究団体協議会としての見解を次のとおりまとめました。

1 「伊那谷学」とは何か

◎「伊那谷学」は学際的な学問の総称

自然・人文・文学・文芸等この地域で取り組まれるすべての学究が対象。

◎「伊那谷学」は今を記録する地域学

過去・現在の検証に基づき未来を紡ぐことに寄与する。

◎「伊那谷学」は各研究団体の活性化と人材育成

各研究団体等の課題解決に向け、「伊那谷学」をキーワードとして「伊那谷研究団体協議会」をひとつの核とし、各団体の活性化および後継者および支援者等の人材育成を図る。

◎「伊那谷学」は上下伊那をエリア

赤石・木曾山脈と天竜川に規定される伊那谷全体をいずれの分野においてもそのフィールドとする。

上記を踏まえ、「伊那谷研究団体協議会」として関連機関等と連携して、研究成果等の利用可能なシステム構築に努め、圏域住民の知的向上に資することへも意識的に展開する。

2 「伊那谷学」推進のあり方

◎ 伊那谷学推進の主体者として取り組む

伊那谷の自然や歴史・文化の研究は、地域での地道な研究を通して深められる。研究は、ある課題を明らかにすると共に、新たな疑問や課題を生み出し、次の研究が始まる。諸先輩方のこうした取り組みで伊那谷の特色の一端は明らかにされてきたが、まだ明ら

かにしたい、すべき課題は無尽蔵にある。

そこで、伊那谷研究団体協議会構成団体はそれぞれの分野にかかわって、一層主体的に調査研究する意欲を高めながら実践することを通して伊那谷学を推進する。あわせて、各研究団体の伊那谷学への関わり方や取り組みについて、更に検討して行く。

◎ 研究成果を書いて残す

研究成果は公開されなければ、研究した人の個人的なものになってしまい、次への繋がりや発展が見込めない。たとえ、研究発表会等で口頭発表してもその記録が公表されなければ、その場限りになってしまう。

そこで、伊那谷学を推進する上で、『伊那』をはじめとする各会誌や会報等に積極的に研究成果を書いて残すようにする。と同時に、発表文は執筆者が伊那谷研究団体協議会事務局に一部寄贈し（コピーでも可）、事務局では定期的にホームページで公開し、必要に応じてコピーサービスもしていく。

◎ 異分野間での関わりを緊密にしていく

伊那谷学の目的は、伊那谷の自然や文化・歴史等を明らかにし、未来創りに役立てようとしていくことである。そのためには、それぞれの方法論に沿って時間的経過を含めた今を記録し、意味づけていくことが出発点となる。しかし、自然や文化・歴史等は、そのみで成り立っているのはなく、相互に密接に関連しあっていることを忘れてはならない。

そこで、伊那谷研究団体協議会事務局を中心に各研究団体の事務局を結ぶ「情報提供ネットワーク」機能を強化・整備する。各研究団体事務局では、誰に聞けば適切な情報を提供してもらえるか、構成員の専門性について把握しておく。

◎ 大学関係者など専門家と積極的にかかわっていく

地方にいと、研究に関する最新情報が得られないことが多い。昔取った杵柄的な発想のみの研究では、研究の深まりが乏しくなってしまうので、大学等の研究者とは積極的にかかわり、必要な情報を得ながら研究することで伊那谷学は深化していくと考える。

そこで、伊那谷と関係の深い専門研究者を各研究団体から情報提供してもらい、伊那谷研究団体協議会事務局では「専門研究者リスト」として整備し、必要に応じて活用できるようにする。

◎ 住民の理解を得て、共に研究する姿勢を高める

地域のことは、地域住民がよく知っている。その内容には科学的でないものもあるが、研究のヒントになるものも数多くある。

そこで、研究の目的と調査内容をていねいに説明して理解を得ると共に、研究成果を地元公表して、伊那谷学への関心を高めていく。

3 その他必要事項

◎ 行政を活用し協働していく

飯田市では、『地育力向上連携システム推進計画【改訂版】』が作成され、その中に、伊那谷学が登場している。これによれば、…「伊那谷学（伊那谷の自然と文化をテーマとした学術研究）の推進は地育力の向上に欠くことのできない要素である…とし、…この領域におけるネットワークを構築していく必要がある…としている。そして、…地域内の市民研究組織と行政機関が連携し、地育力の担い手を育成していくことを念頭に置

いた内発的なネットワークを構築していくことが基本…として前期計画期間である平成19～23年度推進し、研究機関ネットワークの構築が進展できなかったとの内部評価がなされた。

そこで、平成24～28年度の後期計画期間では、飯田の価値と独自性を認識する上で極めて重要な「伊那谷学」分野に絞った地育力の担い手育成のためのネットワークの構築を重点としている。そして、連携システムでは、伊那谷研究団体協議会を伊那谷学の推進主体とし、構成団体による専門講座や研修等の取り組みを通して、伊那谷学・地育力の担い手が育成されていくとしている。

こうした行政側の期待値に対して、自分たちの研究目的を最重要としつつも、積極的に応えていくことは大切である。そこで、行政側が考える専門講座や研修内容について伊那谷研究団体協議会事務局で集約し、関連研究団体が協力していく。

◎ 学校教育と連携する

各研究団体に共通している課題として若年後継者不足が上げられている。伊那谷学への興味関心を高める活動を出前授業などを通して行う必要がある。

そこで、市町村教育委員会に対して伊那谷研究団体協議会会長名で、可能な出前講座の具体的な内容を案内してみることも良いと考える。そして、子どもを通して保護者に伊那谷学の面白さや大切さが伝わるように努める。保護者の中には、興味関心はあってもその関わり方がわからないといった現状もあると思われるからである。

◎ 研究結果をもとに提言を行う

伊那谷学は、伊那谷の自然や歴史・文化を学際的に研究する学問であることから、伊那谷学推進主体者として積極的に研究していく中で、現実に横たわる様々な課題や矛盾が見えてくる可能性もある。こうした課題や矛盾等に対しては、伊那谷学で明らかにできた客観的事実をもとに提言していく。

おわりに

伊那谷は長野県の南端部に位置し、木曾山脈と赤石山脈の間を天竜川が北から南に流れ、中央構造線も存在し、豊かな自然環境と温暖な気候条件に恵まれ、交通の要地でもあり、早くから人々の営みがあり、今に至っています。

そのため、行政区画上の上下伊那郡内には、様々な天然記念物・文化財が数多く残されており、それらから伊那谷ならではの姿を知ることができます。それらの多くは、この地に住まう住民にとっては、あって当たり前存在であり、改めて問い直すこともなく、言い換えれば空気みたいな存在ともいえます。

地球規模での環境問題は、空気そのものに目を向け無ければならない現実を突きつけ、空気そのものの大切さがやっと認識されるに至っています。何か事が起きないと認識されない普通のこと・ありきたりのものに目が向かないことなど、今こそ気づきが必要な時ではないでしょうか。

伊那谷の森羅万象、すなわち、伊那谷の自然、またその中に営み続けてきた人々の有り様の全てを考えることが、この地における地域学であり、「伊那谷学」という呼称をもって推進することが、まさに、この地の独自性や特徴を醸し出す極めて効果的な戦略と考えます

以上